

十字路で立ち話抄二〇十六年一月〜二〇十七年十二月

遺失体

吉田惠吉

目次

新しい箸	1
交歓	2
逸れ鳥	3
紐迎え	4
中二階	5
近親	6
苦戦	7
手袋	8
居残り	9
そして	10
本立て	11

ホワイトボード	12
雪煙	13
領域	14
丘陵	15
爪弾き	16
振幅	17
剥離	18
懸け橋	19
反り	20
フロー	21
潮目	22
水門	23
縮小	24

崩落譜	37
身震い	36
落語	35
減衰	34
縮小	33
反照	32
背表紙	31
芽吹き	30
祭礼	29
綴じ代	28
亀甲	27
藪漕ぎ	26
当たり目	25

パンク?.....	38
切り絵.....	39
一輪挿し.....	40
始動.....	41
転開.....	42
遠隔.....	43
食卓.....	44
六月の街風.....	45
尾翼.....	46
蝶と猫.....	47
仲立ち.....	48
師匠.....	49
浮動.....	50

石ころ	51
梅雨晴れ	52
掃き掃除	53
紐解き	54
形跡	55
普通	56
父の手	57
虫干し	58
下山	59
敷物	60
遅延	61
夏の欠片	62
罅線	63

炎天蚯蚓	64
提灯	65
積ん読	66
過誤	67
素手	68
息遣い	69
踵呼吸	70
眺読	71
蜻蛉	72
足止め	73
遊園	74
家族樹	75
複製	76

志向	77
手がかり	78
起こり	79
波長	80
導管	81
端緒	82
秋海月	83
情熱	84
風まかせ	85
離陸	86
盗み	87
踵立ち	88
秋泳	89

充念	90
紅葉便り	91
普段履き	92
遮断機	93
吊るし柿	94
手の内	95
手入れ	96
残滓	97
縄目	98
凶柄	99
重・点	100
雪下駄	101
飛魚	102

蛇腹	103
鳥糞	104
妙術	105
摺り足	106
目配せ	107
点綴	108
鶏鳴	109
上へ下へ	110
照準	111
振れ幅	112
傍系	113
もつれ	114
下着幻想	115

転写	116
読み書き	117
内観	118
分身	119
欠けら	120
後先	121
風評	122
春屋台	123
同化	124
ずれ目	125
遅延片道	126
手工	127
狭間	128

刈り込み	129
若葉マーク	130
痕跡	131
欠落	132
音痴	133
橋上	134
時の渚	135
気球	136
やれやれ	137
下絵	138
逃れ道	139
調律	140
若葉末節	141

偏食	……142
花器	……143
圧縮	……144
接写	……145
草いきれ	……146
無造作	……147
枝ぶり	……148
流木	……149
寄り添い	……150
舟状雲	……151
切り株	……153
移ろい	……154
触手	……155

旋毛	157
浮遊	158
架橋	159
格子	160
浮き身	161
語り口	162
浮遊操法	163
川下り	164
起居の渚	165
石蹴り	166
賭け虫譜	167
括弧	168
擬態	169

予報円	170
舞台	171
枯れ井戸	172
墓参	173
灰神楽	174
穴蔵	175
字画	176
姿勢	177
小言	178
無駄履き	179
体内便り	180
芋虫	181
海綿	182

腹立ちぬ	183
波乗り	184
遺失体	185
伏流体	186
円環体	187
見掛け	188
演戯者	189
穴蔵	190
風穴	191
伸展	192
ずれ	193
無体	194
秋暖簾	195

背に腹は	196
背後霊	197
口癖	198
抜刀	199
訛り	200
二の足	201
揺らめき	202
流域	203
引用	204
ワープ	205
身繕い	206
数詩	207
数詩	207

書き損じ……………208

逆さ杭……………209

逆気配……………210

反転……………211

新しい箸

数十年ぶり
袖を通した
着物の汚れ

嫁の手慣れ
雑煮の味も
今更ながら

ヤゴを脱ぎ
飛び立った
里山の眺め

覚えのない
着心地とは
何だったか

腰のあたり
纏まり良く
解き放たれ

箸の捌きも
お節の前に
よどみなく

(16.01.01)

交歓

無駄な手が
年明け結ぶ
庭の雪つり

見届けつつ
数十年ぶり
招く旧知に

辿りきれぬ
生き様写す
絞り具合で

一期一会の
新年会から
環世界まで

踏み外した
碁石を打つ
響きが貫き

ミクロから
マクロまで
拡がる微動

(16.01.05)

逸れ鳥

飛び石伝い
切り抜けて
追いつかれ

川沿いから
消え去った
密集カラス

消息を問う
というより
生存確認が

渡り鳥鳴く
夕暮れ空に
誤配されて

明日の池を
探すように
滑空する羽

夜の階段で
墨を含ませ
足跡を消す

(16.01.08)

紐迎え

捨てがたい
枯れ木鉢を
抱き上げて

垣根越しに
受け取った
宅配便の箱

下ろす床に
雪吊り枝を
縛った縄目

正月に着た
着物の紐と
帯が蘇って

雪吊り縄の
支柱に映る
庭木の内観

腐葉土深く
根こそぎに
葉脈が溶け

(16.01.12)

中二階

螺旋階段か
直登階段か
どちらかに

気づいたら
足がかかる
待ち合わせ

テーブルと
椅子を支え
ガラス張り

せり上がる
舞台めいた
吹きさらし

夕暮れ鳥が
駅舎を埋め
舞い飽きず

ロビーには
行き先なく
咲く啓翁桜

(16.01.15)

近親

白い摩擦に
覆われたら
滑らないか

布を巻いて
紐に託せば
着崩れして

暴力祖父の
着物姿から
より遠くへ

心身違える
隙間目掛け
巻きつけて

解けそうに
密着すれば
観察できず

内向すれば
老齡と死が
腑分けされ

(16.01.19)

苦戦

行き帰りの
風向きから
抜け出せば

静まり返る
校舎の陰の
身体の暗闇

身内なれば
勝敗に拘る
目くらまし

結果ばかり
追いかけて
終われない

中途半端な
腰砕けこそ
褒めどころ

食い詰めた
肝のあたり
裏返されて

(16.01.22)

手袋

手袋をして
掘り返せば
狭まる動き

朝の除雪が
積み上げる
抜け水の音

庭の雪玉を
叩き落とす
素手の心地

寒い縁側と
階段を抜け
氷柱の寒さ

極渦の影が
靡いた袖に
地軸を通し

抜け落ちた
作為の塊に
書き置きが

(16.01.26)

居残り

昨夏休みの
窓口越しに
見えなくて

信と不信が
寄せて返す
教育の浜辺

前後13期の
乗り継ぎに
居合わせた

新旧校舎を
遠く揺らす
天地異変も

介護と病の
見取り図も
描ききれず

最終授業を
終えた教室
居残る学生

(16.01.29)

そして

降り積もり
雪解けまで
作為もなく

覆い隠され
割線が入る
偶然の直感

呼び込まれ
心身深くへ
溶け込ませ

寒気去らず
布団からは
出にくい体

試合に負け
悔し泣きも
できない躰

快眠快食を
貪る体操で
起き上がる

(16.02.02)

本立て

雪化粧薄く
ゲレンデを
遠く望んで

立春の朝に
上ってみた
活字の階段

木目模様の
ガラス越し
見聴きした

読書空間が
更新される
演者と聴衆

ステージと
観覧席から
消えた楽屋

窓越しでも
通りすがり

街中の舞台 (16.02.05)

ホワイトボード

踏み抜いたら
深さが分かる
空の高さまで

横切る二羽が
前後を譲って
消えゆく辺り

なんの事だか
分からないと
告白されても

教科書不要に
切り替えたら
答えはどこに

調べることが
どういう事か
分かり合えず

向き合ったら
板書出来ない
書き損ないが

(16.02.09)

雪煙

青の方角に
分らない
垂直と水平

路駐が多く
路線バスが
走れなくて

バス停から
振り返った
初滑り斜面

音のしない
飛行機雲に
吸い込まれ

孫を背負い
滑り降りた
シユプール

遠い稜線に
巻き上がる

雪煙の彼方 (16.02.12)

領域

寒暖激しい
コブ斜面が
日替わりで

空カートの
轍を辿った
買い物散歩

二人分かれ
一緒に見る
別々の映画

多様な向い
風に居着く
対象の内側

逡巡すれば
妄想紡いで
歩き疲れて

たった一人
で実感する
誰かが勇氣

(16.02.16)

丘陵

色づき始め
なだらかな
梅林の丘が

産毛の陰で
グラス傾け
泡立つ口内

波打ち際に
歩み寄って
寒雀の鼓動

稜線を外し
呼吸に沈む
窪みの辺り

雪解け誘う
谷筋を聴き
分ける歓び

成り成らぬ
斜面を弄る
陽射し撫で

(16.02.19)

爪弾き

弾けないで
爪痕残した
ギターの傷

磨いた爪を
頭突きまで
突き詰めて

爪先立って
弾き飛ばす
額の先まで

無手勝流の
気後れから
逃げ腰まで

乗り遅れた
体を割って
追い込まれ

鱗を逆立て
魚群が描く
道具の動き

(16.02.23)

振幅

振り切れない
針の先で輝き
遠ざかる星に

行き場ないと
文字で刻んだ
指のひび割れ

寒ブリ宣言も
取り消された
冬の湾内深く

粉々に刻まれ
深海潜水艇に
積み込まれて

取り残された
裸身際立たせ
泡立つため息

心身の時空に
絡め取られて
編まれた網目

(16.02.26)

剥離

三月の光が
捲り落とす
着雪モール

登り下りで
急ぎ遅れる
出会い頭を

追い越して
抜き加減に
行当たれば

還暦過ぎの
鞍部に休み
泡立つ心身

スポ少から
部活までの
初心の構え

身に余って
あつてなき
抜け殻にも

(16.03.01)

懸け橋

満開の梅枝の
鶯を撮り逃す
心地よさから

山なし谷なし
筋なし物語へ
逃げ出せるか

いつか捲った
頁で蓋をした
地下の書物蔵

遠い読書から
活字の履歴を
数えた閲覧へ

運動嫌いでも
なくて本当は
学校体育嫌い

集団で競った
球技などから
逃げ果せたか

(16.03.04)

反り

濃霧を切り
開くように
爪切る音が

見ず知らず
花の蜜吸う
小鳥の踵に

風に煽られ
撓む小枝を
結び合わせ

無名の袖を
見つけ通す
腕前の指先

掴み損ねた
挨拶を潜る
頭角の先へ

唄う顎から
運指で辿る

練習曲まで (16.03.08)

フロー

一人称では
語られない
場所の獲得

自動階段や
昇降機だけ
利用できて

ミクロから
マクロまで
見尽くせず

壊れやすい
世界と触れ
合う情緒が

潜る身体の
回廊を辿り
殻を破って

終わり時を
いつまでも
置き去りに

(16.03.11)

潮目

無くなつた
羊水が磨く
母音の群れ

枝分かれを
引き絞つた
雪吊り外し

腐葉土深く
仕舞い込む
子音の欠片

母の庇護の
根から葉へ
幹を揺らし

大洋を渡る
船のように
発語を權に

海流を割る
島影が語る
方言の潮目

(16.03.15)

水門

木製の床を
撓ませたら
ガラス開き

環状線から
抜け出せば
水鳥の出番

旅立ち前の
水掻きから
泡立つ水深

水面を打つ
名も知らぬ
樹影が崩れ

爪先立った
自撮り棒に
問いかけて

折り返せば
背後に迫る
未知の関門

(16.03.18)

縮小

里山を抜け
寄り道した
陽溜りから

手折っても
尽くせない
蕨の温もり

仕舞い込む
スキー板で
滑り足りず

回転感触を
身体各部に
埋め戻せば

解体しつつ
取り外せる
雪囲い仕様

割れた体で
縮みこんで
時節合わせ

(16.03.22)

当たり目

外観からは
雨上がりの
郷土の眺め

寒の戻りに
暖簾を潜る
熱燗の誘い

畳の上での
寝起きから
呼び戻され

片膝立ちの
草むしりで
疲れない体

着崩れ無し
自在な腰の
立居振舞い

肩掛けから
腰蓑までに
気づく仕草

(16.03.25)

藪漕ぎ

回転翼なら
何でもいい
設計志向で

山間の村を
飛び立った
羽搏く音に

ポケットの
あずき蛇を
解き放って

部室を離れ
竹刀が届く
体育館裏へ

虚弱な力を
分岐させる
術も知らず

藪漕ぎから
滑り落ちて
麓に目覚め

(16.03.29)

亀甲

襖や障子の
開け閉めで
返す手の甲

しなやかに
開く背中が
呼び覚ます

掃き掃除や
除雪作業に
薪割りなど

祖父の背を
伝い落ちた
汗が滲んで

渴く老いの
編み目深く
絡め捕られ

結び方から
忘れ果てて
ほどけない

(16.04.01)

綴じ代

読み書きの
つなぎ目を
綴じ合わせる

見開きなら
これまでと
これからの

裏表すべて
見通せない
和装本から

数えきれぬ
虫食い跡で
読み落とす

いまこの
交差点から
立ち消えて

新たな間に
立ち現れる
転機の狭間

(16.04.05)

祭礼

鳴き合わせ
競うように
咲き揃って

春の幕間で
見上げれば
山車の軋み

雑踏の奥で
捲し立てる
香具師の声

皺多い手に
宿場町まで
連れ出され

祖父と孫を
隔てる歳が
着流す掘割

喧騒を輪に
ゼンマイを
巻き戻す船

(16.04.08)

芽吹き

七年経つた
朝の線香を
等分に折り

ひと知らず
生死を分つ
粘葉装の頁

芽吹かない
盆栽の陰で
冥想を重ね

花瓶に挿す
花の寿命を
刈り込めば

植え込みを
行き惑って
雑草が伸び

引き抜いて
振り下ろす
背中判断 (16.04.12)

背表紙

緑ほころぶ
街並みから
抜け出せば

記憶の中の
映画館から
図書館まで

開け閉めの
音も忘れた
シャッター

閉園された
観覧車から
看板を数え

自転車から
空気を抜く
アーケード

裏から表へ
通り抜ける

空洞の響き (16.04.15)

反照

照葉か猫か
区別しない
玄関感知器

人気のない
静かな庭が
モニターに

こつちから
あつちから
うえからも

交差しては
通り過ぎる
飼い猫の影

縮むように
暮らし保ち
十重二十重

剥き放たれ
周回軌道に
照り返され

(16.04.19)

縮小

自転車から
乗り換えて
昼風呂掃除

萌える緑を
引き裂いて
亀裂が走り

満期退職を
祝う集いの
年金生活者

ライブから
アーカイブ
へ肩代わり

図書館から
書店を覗く
行き掛かり

耳から遠い
熊本在住の
書き手の声

(16.04.22)

減衰

まつたりと
朝靄が隠す
残雪の山肌

雀の春子が
戯れ揺らす
木の芽時に

飲みたくて
アイラ島の
一〇年物など

名前を忘れ
臭い香りが
ボトル姿で

どう見ても
飲むために
飲むだけの

繰り返しを
目指すほど
酒量の衰え

(16.04.26)

落語

四月の雨が
洗う羽織を
脱ぎ捨てて

二足歩行で
思い起こす
娘の初立ち

野生公園で
餌欲しさに
立ち上がり

相棒の肩に
手をかける
熊公と八公

いまこの
立ち姿から
世界に触れ

縦横いずれ
どんな形で
語り合うか

(16.04.29)

身震い

数珠繋ぎに
均衡を先へ
伝える毛虫

気づかない
身構えから
崩れ落ちて

日常纏った
体の張りが
緩みほぐれ

日頃隠され
抑えられた
自分が蠢き

知らなくて
待たされた
新たな均衡

いまここで
崩れそうな
縁を渡って

(16.05.03)

崩落譜

吹き荒れた
風に耐えて
新芽が傷み

青葉害虫に
風穴残さず
出し抜かれ

咲きたくて
見出せない
花の有り様

蜻蛉の尾が
溜池を打つ
波面の拡散

魚眼を隠す
水草に絡む
気泡が揺れ

均衡破れた
水の隙間に
溢れる魚影

(16.05.06)

パンク？

虫ゴム替え
一夜寝かせ
走り出せば

なだらかに
抜け落ちる
脇を吹く風

萌え翻った
緑の粘膜が
躍動すれば

亜脱臼して
こすれ合う
新型自転車

空回りさせ
漕ぎ出せば
側溝が迫り

避け損ねて
溜め溢れる
見返り漕ぎ

(16.05.10)

切り絵

吹き荒れた
五月の風と
葉裏の毛虫

齧られても
空を流れる
雲の擦過音

追いかける
聞きたい音
見たいもの

仕込み杖に
空耳かざし
空目浮かべ

振り返った
庭木の影が
寿命を数え

傾く軒端で
壁抜け促す
白紙の余白 (16.05.13)

一輪挿し

取り替える
季節外れの
写真立てに

時計草から
紫陽花まで
刻まれた旅

置き所ない
花の一枝が
投げ込まれ

貰い受けて
徳利の肌理
銘酒で磨き

水切り刃で
研ぎすます
花びら散る

下駄箱から
仏壇はさみ
床の間まで

(16.05.17)

始動

緑の枝ぶり
透かし見る
飛行機雲が

交差すれば
今朝の運勢
揉み消され

縛るでなく
相まみえて
這わせれば

居合させた
見知らぬ空
地図届かず

巻き飛ばす
竹とんぼの
軸が震えて

擦り抜けた
手のひらに
紐の間合い

(16.05.20)

転開

月明かりに
惑わされる
七つ星の光

人差し指と
親指の骨が
出会う指圧

丁半見極め
座頭の耳が
閉ざした目

落語が語り
尽くせない
衆生の体癖

恣意が繋ぐ
棟割長屋の
縁起を訊ね

夏風が導く
山腹辿って
信貴山絵巻

(16.05.24)

遠隔

毛虫の姿が
消えた庭に
蝶が舞えば

軒下を伺う
無人機から
降下する影

富貴の人が
気づかない
リングの汗

蜂のように
闘い終えた
ボクサーが

立ち向かう
老いた体を
見舞う震災

瓦礫が覆い
隠す破局の
無常の果て

(16.05.27)

食卓 (16:05:31)

水田を掠め
宙返り燕が
皐月の切札

覚えのない
手捌きから
溢れる渴愛

囲炉裏端で
煮炊きされ
孫の胃袋へ

田植えから
稲刈りまで
畦道の弁当

日々繋いで
女系模様の
卓袱台囲み

それぞれの
幼児食から
介護食まで

六月の街風

十数年やつた
頼まれ仕事を
終えた曜日は

サイクリング
日和なれども
お出かけバス

足して百四十
歳の老夫婦が
乗り込む隙間

好きでも嫌い
でもない仕事
に招かれたら

先がないのを
見極められる
橋を渡るだけ

請われたなら
仕事になるが
天職は叶わぬ

(16.06.03)

尾翼

砂利道から
舗装道路に
切り替わる

風向きから
垣間見えた
一瞬の静止

芝居を作り
演じる迄の
楽屋と舞台

打ち急いで
打ち遅れる
打ち上げに

見逃される
たった今に
止まること

水平からも
垂直からも
見放されて

(16.06.07)

蝶と猫

みな古株で
花もまばら
庭の躑躅の

植え込みを
ひんぱんに
往来する猫

動植物化が
露わになる
住人に似て

動きも鈍く
暑さ寒さも
耐え難くて

一輪挿しに
挿す薔薇の
棘に刺され

撮り損なう
装花めいた
揚羽蝶の影

(16.06.10)

仲立ち

雲漉く風に
雨根が乾く
屋根を滑る

アクセルと
ブレーキが
絡み合えば

考えないで
触れ合える
枝葉と幹の

影が傾斜に
残されても
再現できぬ

組み合った
言葉の働き
と動かなさ

勝手気儘と
怒りっぽさ
をとりなす

(16.06.14)

師匠

足で書いた
田畑や庭の
植物誌から

手で書いた
家畜ならぬ
動物誌まで

捲り続けた
良い日悪い
日普通の日

あるがまま
身体を晒す
晩年の祖父

重度介護で
介護ならぬ
老いた母が

時間知らず
眺め上げた
見返り仏様

(16.06.17)

浮動

空模様がらみ
伸び縮みする
パラシユート
ザリガニから
メダカまでを
混泳させても
観察できない
動きの秘密を
閉じ込めた夏
食べられず声
も出ない働き
から動きまで
綾なす伸筋と
屈筋の群動が
織りなす行い
体癖に従って
紐を添わせる
気が即動即変 (16.06.21)

石ころ

遠い田舎道で
老馬と少年が
交わした無言

遺物のような
錆びた銃弾と
磨かれた胡桃

三反百姓家で
幼老を結んだ
引き揚げ家族

失念していた
年齢差が65
だったりして

竜巻のごとく
過ぎ行く時の
痕跡のなかで

胡桃を揉んで
柔らかくした
指で磨く錆び

(16.06.24)

梅雨晴れ

撮り溜めた
写真の壁紙
シヤツフル

紫陽花から
半夏生まで
九十九折で

散策しても
拡がらない
庭の奥行き

受話器から
数十年ぶり
ヨメの知人

やっつける
手際料理で
食いつなぐ

日々の幸せ
指摘されて
孫話に落ち

(16.06.28)

掃き掃除

見え隠れの
夏の野鳥を
探す雲間で

鳴き声から
姿を探せば
凶鑑に消息

湿った床で
怪我で転び
重いモップ

引きずれば
聞こえ来る
家族の不在

書き損じも
ただならぬ
老いの行末

逆らわない
身体使いで
何に逆らう

(16.07.01)

紐解き

蒸し暑くて
寝苦しい夜
の寝返りで

ミステリー
の転がった
殺傷死体に

仰向けから
うつ伏せの
逆上寝相で

背に腹など
厚みの違い
変わり果て

メタボ腹も
裏返されて
ぺちゃんこ

眠る脳細胞
掻き分けて
はみ出す謎

(16.07.05)

形跡

二階の窓へ
這い上がる
朝方の蝸牛

夜を呼吸し
闇に寛いで
姿勢を保ち

そそり立つ
襜で撫でて
動き続けた

庇の彼方に
野鳥の姿が
目を光らせ

強風の折に
網戸に貼り
ついたまま

昨年の殻が
跡形もなく
剥ぎ取られ

(16.07.08)

普通

まるで別物だよ
クラシックから
タッチに買換え

どう操作すれば
シャッフル再生
できるか迷った

1分あたりなら
心拍 60 ～ 80 回
呼吸 16 ～ 20 回

の健康成人では
最高血圧 120 位
体温は 36 度前後

に素早く戻れる
息遣いで緩んだ
快適姿勢で聴く

異常から正常へ
機器との隙間で
自由な行き来が (16.07.12)

父の手

ガラクタで
満杯だった
オモチャ箱

転がり出た
胡桃の艶に
残る手触り

三八式銃の
弾丸らしき
潰れた信管

日本刀から
指揮刀へと
刃文が伝へ

母が残した
父の遺品に
面影も無く

衰え握力で
触るほどに
父性握れず

(16.07.15)

虫干し

耳を当てれば
ガソリンカー
の遠い響きに

夜の藁人形を
射抜いた針が
五寸釘の太さ

レールに並べ
鉄橋の下へと
潜り込むだけ

稲田を揺らし
轟音走り抜け
乱雲の向こう

拾い集めれば
潰れ鈍く光る
手裏剣の重さ

夏の大掃除の
干し畳の裏に
残された傷跡

(16.07.19)

下山

剣や槍など
登った脚は
過ぎ去つて

帽子掛けに
裏返された
烏打ち帽子

板の間から
畳の上まで
老いを担ぎ

浮きが三分
沈みが七分
泳ぎ知らず

裏返つても
剥がれない
甲羅の素性

古登山靴に
夏山越した
履き心地が

(16.07.22)

敷物

伸び具合に
むしり跡が
残る庭の草

四畳半から
老母の影が
転がり出て

試してみる
腕立て腹筋
逆立ちなど

無残な名残
曝け出した
六畳の畳裏

覆う強張り
力みを解す
カーペット

耕し損ねた
身体を畑に
蒔き直せば

(16.07.26)

遅延

暑さ呼吸し
姿勢正して
夏草の揺れ

バス停高く
羽搏く鷺が
飛び去れば

同じ仕草を
できるだけ
引き延ばし

ゆつくりと
持ち越せば
やってきた

遅延バスの
ドアが開く
のり心地に

初心目線で
立居振舞う
身体の間々

(16.07.29)

夏の欠片

田畑の脇を
駆け抜けた
猟犬が吠え

羽ばたけば
群れの中の
一匹みたい

拾ってきた
猫の欠伸に
出迎えられ

狩猟採集に
明け暮れた
県境の裏山

飛び越せる
夏の海峡を
泳ぐように

土器の欠片
繋ぎ合わせ
狩人の時空

(16.08.02)

罨線

夢のように
猫が啜えて
持ち帰った

何ものかの
肉の塊から
転がり出た

手の骨格で
漉いた紙に
刻まれた跡

飛び跳ねる
文字の影を
摘み損ねて

めくり返し
めくり戻す
指の隙間で

挟み込めば
尻尾を振る
言葉の虹が

(16.08.05)

炎天蚯蚓

冬の岸边から
雪かきをして
夏の浜辺まで

泳げないから
日記のように
舟をつないで

裏から前庭の
夏草を刈って
人称の航海へ

無人島向けの
読書記録やら
プレイリスト

見聞き目的や
努力の限界に
縁がない堆肥

微熱くねらせ
闇を縫う光が
宇宙へ抜けて

(16.08.09)

提灯

竹を削つて
ひごに紙を
張り回せば

はみだした
余白に沈む
遠い登山図

生き延びた
小商いから
ご来光まで

霊山登山に
導いた闇を
纏ったまま

女人禁制の
尾根筋から
藪を漕いで

小刀を頼り
刻む谷筋に
麓の灯りが

(16.08.12)

積ん読

走馬灯浮かべ
八月の山から
海に届く流れ

上りと下りを
混ぜ合わせて
渦巻く濁りに

精魂と精霊が
前後入れ替え
分け入る霊性

漕ぎ続ければ
自転車も舟も
体に馴染んで

こぼれ落ちた
一滴の汗から
新しい立ち技

中州に居並ぶ
鳥が飛び立つ
花火の後の空

(16.08.16)

過誤

消えかかった
踏み跡を辿り
雑木山の頂へ

平穏な最後に
救急車よりも
看取り医師が

落ち葉を掃き
見える墓石を
通路のように

介護の階段で
取り残された
未開封の便り

読みきれない
文字の時空に
折り重なって

書き残された
読経のように
降り注ぐ言葉

(16.08.19)

素手

机上に並ぶ
拾った石に
古い木の実

木彫り眺め
握り転がし
触り読めば

削り上げた
手のあとが
見えなくて

淀みがなく
途切れない
呼吸が整い

始まりから
終わりまで
継ぎ目なく

障害もない
受けて動く
明確な即興

(16.08.23)

息遣い

海鳥が運ぶ
夏の息遣い
吹き抜けて

尾根を辿り
滑り落ちる
雲海の流れ

老いの坂道
きれぎれの
呼気と吸気

杖をついて
渡りきれぬ
三途の浅瀬

引き出しに
指跡残して
破れた聖典

写真立てに
はまらない
遺影の余白

(16.08.26)

踵呼吸

藪漕ぎ斜面の
土踏まずから
膝までの緩み

寒稽古の床で
うづくまつた
素足の冷気が

布団の中まで
駆け込んでも
冷たい指先に

代掻きあとの
田の温もりで
ふやけるまで

長い呼吸から
短い吸気まで
蛭が伸び縮み

足裏で交わす
気の流れから
取り残されて

(16.08.30)

眺読

箱庭みたい
自宅二階の
窓際読書を

詰め込んだ
カバンを肩に
乗り込んだら

古本漁りが
車窓に映る
紙魚のよう

季語の手を
詠み込んだ
スキャナー

閲覧席から
町並みまで
短冊に刻み

活字で編む
葉を浮かべ
秋めく空へ

(16.09.02)

蜻蛉

刈り残した
草がゆれて
飛び立てば

夕日に輝く
空しい鞆が
とんぼ返り

人型一体に
敷き詰めた
マットレス

心にもなく
引き継いだ
身体の行方

掴み損ねる
個を超えて
彷徨う空に

昼夜違わぬ
方向音痴で
問わず語り

(16.09.06)

足止め

立ち寄れば
雷雨が洗う
窓際閲覧席

かろうじて
封じ込めた
歪んだ頁に

映り込んだ
雷鳴の如き
言霊が走り

労働の手が
とどかない
雨と雲の闇

稲妻走って
唸る琴線が
囁み碎かれ

数え切れず
強制された
不幸の彼方

(16.09.09)

遊園

すれ違つた
曲がり角で
耳に残つた

日々の死を
歌いあげた
四角い紙箱

パンドラの
箱のような
重さ軽さ？

木箱に詰め
川に流した
水族館の昼

鴉に襲われ
背後が怖い
朝の植物園

謝肉祭なら
動物園では
閉園後から

(16.09.13)

家族樹

剪定された
庭木の陰に
石灯籠など

抱え起こす
やせ細った
重たさから

松のように
根切りされ
出自を包み

濡れた筵で
縛りあげて
促す根付き

庭石の下に
埋められた
猫の鳴き声

遠い背戸に
残してきた
庭木も枯れ

(16.09.16)

複製

葉のように
著者の頁に
挟み込まれ

読むことの
底を分かつ
生前と没後

ガキ大将を
追いかけて
製材所裏へ

大鋸屑から
拾い上げた
髪切虫の声

牛のお産を
やわらげた
納屋の藁束

隠し部屋で
飼う葉桶を
蹴飛ばした

(16.09.20)

志向

風雪を凌ぐ
夏を越した
庭木の剪定

枯れた樹が
吊るされて
撓むリフト

ワイヤーで
運び上げた
労働の日々

解き放たれ
待ち受けた
斜面の重力

第三の腕が
体軸を掴む
新しい捌き

長い腕から
振り下ろす
無形の靈力

(16.09.23)

手がかり

朝の窓際で
樹影見えず
木犀の薫り

見えだした
山脈の如く
立居振舞い

表層を洗い
深層を拭く
違和の正体

デパートの
屋上で社や
遊園地消え

跡地に佇む
巨大広告の
清涼飲料水

体、躰、體
どの身体で
飲み干せば

(16.09.27)

起こり

立ち止まり
鏡に映れば
木目が階段

しゃがんで
覗き込んだ
関節の裏側

手触りなく
聴きかける
耳のかたち

腕を伸ばし
打ちつけて
畳み込まれ

骨格を伝い
響く速さを
写す三面鏡

人格も消え
心おどれば
白黒問わず

(16.09.30)

波長

放課後には
秘密基地で
自然に塗れ

背丈の影が
裏山に透け
川原へ伸び

昼下がりに
寝そべった
土手の草叢

夏の宇宙に
見えていた
星屑の響き

老いてから
幼い彼方へ
ひき返せば

抗うだけの
第二の秘密
基地に紛れ

(16.10.04)

導管

剪定された
庭木の根が
地中に伸び

聞き分ける
空から降る
エネルギー

樹液の中で
絡み合った
葉緑と揚力

重力に抗い
立ち枯れた
古木の年輪

光を奪われ
遡れなくて
立ち止まり

天に根付き
地上に残る
無尽の刻印

(16.10.07)

端緒

鳴き声など
忘れ去った
螻蛄の前足

蟪蛄の斧が
ギザギザの
弧を描いて

黄色い蝶が
迷路を描き
障子に透け

直射日光へ
抜け出した
蚯蚓の恐怖

違和の緒が
噛み切れず
吐き残され

触手を軸に
蟋蟀が織る
咀嚼の歯型

(16.10.11)

秋海月

秋の建築に
光や風など
濃淡を添え

傾く噴水の
しぶきから
逃げる蜻蛉

咲き揃った
コスモスが
川面に映え

河口に届く
まで流れに
皿を浸せば

陸の河童が
鯨や海豚に
劣らぬ動き

汽水域から
深層水まで
茫茫と漂う

(16.10.14)

情熱

遊び疲れて
投げ出され
錆びた輪金

埃をかぶり
うづくまる
木組みの場

残り時間を
解き放つて
組み合わせ

驚きだけが
掴み取った
知恵の無念

庭のつる草
日がな一日
伸ばす手足

動かす度に
思い違つて
無限の遠さ

(16.10.18)

風まかせ

叔父さんに
誘い出され
山葡萄採り

尾根を数え
秋風に紛れ
県境の谷筋

嘘っぱちの
処世技術が
まかり通り

崖際の木に
引っ掛かり
墜落しそう

垂れ枝掴み
引き揚げる
身過ぎより

ダイランの
切れ切れの
歌いっぷり

(16.10.21)

離陸

庭木の枝に
引つ掛かる
破れ落下傘

滅多に虫も
かからない
ホバリング

慣れ親しむ
軒端遊びを
抜け出して

竹馬が繋ぐ
両手両足が
地面を離れ

デコボコの
田舎道から
原っぱまで

初乗りした
自転車倒れ
転げ落ちて

(16.10.25)

盗み

鳥と雑草が
入れ替わる
ホトトギス

カッコウの
真似をする
見取り能力

盗んだ巢に
散った胸毛
田植えどぎ

初音が響く
林の辺りに
偏ったまま

芋を焼いた
風に乗れば
歪んだ方位

物事と表象
繋ぎ分けて
盗み見れば

(16.10.28)

踵立ち

元痔主なれど
寒さを和らげ
温水洗淨便座

金に縁薄くも
視力を補つて
メガネ持ちに

鉢が大き過ぎ
試着し続けた
合わない帽子

心身に屯する
虚無と神とを
行き来したら

衰えつつある
第二の自然が
見えにくくて

祈りを冷ます
呼気を強める
未知なる自然

(16.11.01)

秋泳

山肌を下つて
河原を跳んで
庭先に紅葉が

小さな枝葉が
宿つた幹から
根付いた支え

天井から落ち
痩せヤモリを
軒下で休ませ

無から有へと
転がり落ちる
自然の呼吸で

盲蛇となつて
枯葉かき分け
秋の岸辺まで

日溜りに響く
息遣いを残し
生き延びたか

(16.11.04)

充念

半月見下ろす
人気もまばら
夕暮れの街中

気ままな明滅
手足休まらぬ
信号とネオン

手を膝に為す
箸置き咀嚼の
味わい知らず

歩きスマホの
位置情報から
思い手放され

漏れ聞こえる
疎らな静寂に
聞き耳打って

途切れる思い
忘れ果てれば
無念が気づく

(16.11.08)

紅葉使い

黙契のように
街路に訪れた
黄葉の佇まい

自然な風から
育まれた歪み
折り畳まれて

普通の風へと
放たれた葉が
血相を変えて

黄昏の調書に
書き込まれた
身の程知らず

悪しき習癖が
問い質されて
身動きすれば

導管の鼓動が
息づかいから
心の動きまで

(16.11.11)

普段履き

衣替える
山肌も頭
履き潰した

草鞋や草履
だけでなく
雪下駄など

登山靴やら
スキー靴が
藁靴替わり

足袋を脱ぎ
足指が掴む
川底の深み

浮上すれば
溺れさせる
スニーカー

着忘れても
紐で触れば
普段の着物

(16.11.15)

遮断機

日溜まりに
舞い込んだ
羽毛を集め

乾ききつた
枯葉に編み
込んだ帽子

脱ぎ放った
晩秋列車の
車掌が合図

走り出した
両眼視野が
引き寄せた

レール幅で
息づかいが
打ち込まれ

上り下りの
行き違いを
繰り返せば

(16.11.18)

吊るし柿

もいだ柿を
丸ごと齧る
子どもの手

皮を剥いて
縦切りした
種ぬき果肉

蒂を残せば
楊枝いらず
の食べ易さ

刃物使用に
手出し愚か
口出し不要

気づかされ
胸鎖関節を
無闇に辿り

吊るすほど
寒く乾いて
振り抜けば

(16.11.22)

手の内

一夜すぎて
払い落され
黄葉の並木

大手を振る
ところまで
初心者腕

その先まで
歩むために
使い込めば

振り放せぬ
思い込みで
仕切られて

内観すれば
潜り抜ける
心体と身体

在るがまま
為すまでは
内なる腕が

(16.11.25)

手入れ

薄陽あたり
紅葉庭木が
背伸びして

雪吊り待つ
松の梢から
縄目の俯瞰

家屋に隠れ
近くて遠い
体感の裏側

挨拶をして
入る四隅に
視線届かせ

身体の影響を
脱ぎ捨てた
言葉の残渣

掃き溜めで
枯葉の型が
人体を模写

(16.11.29)

残滓

砂利道走る
響きが残る
自転車の尻
舗装された
散歩道しか
歩けない靴
紐結ばない
靴で歩けば
よろける体
つま先から
かかとまで
掴まり立ち
娘や孫らが
立ち歩いた
畳の足跡と
立ち上がり
襖に落書き
届いた高さ
(16.12.02)

縄目

朝の雷鳴を
追い払って
強まる雨足

行き届いた
剪定を翳す
庭の雪吊り

掌のように
引き絞った
居場所から

飛び去った
蛾が翻って
娑婆の模様

表に人間を
裏に身体を
縫い合わせ

避け得ない
縁に囚われ
二足の草鞋

(16.12.06)

図柄

街歩きから
血脈見えぬ
病葉見据え

雨上がりの
舗道に濡れ
透ける葉脈

洗い忘れぬ
老いる肌の
背にシミも

年々新たに
春夏秋冬を
着飾る樹木

花木の間で
季節の華を
着替える女

時節を飾る
匂を並べて
手慣れた腕

(16.12.09)

重・点

草臥れたら
落とし試す
電池のよう

無駄力使
いが抜けたら
内側の自然

揺さぶられ
抜け落ちて
スケルトン

間違い誰も
教えられぬ
問いかけに

忘れそうな
きっかけの
太りはじめ

気づかない
体内言語が
重さの中心

(16.12.13)

雪下駄

冠した齒の
嚙み合わせ
初積雪の朝

融雪装置が
消し忘れた
屋並の傾き

家を建てる
恥ずかしさ
隠す様式も

紛れ込んだ
住み心地と
引き換えに

丸投げする
雪捨て場や
屋根雪など

生え残って
傾く奥歯で
乱れる前歯

(16.12.16)

飛魚

当たり前に
育てられた
大気や水中

抜け出して
生き延びる
翼や背びれ

のたうつて
筒のように
くねらせて

這い蹲った
胎内記憶の
誕生日まで

くたばれば
学ぶことが
終わるのか

とりあえず
身体を脱ぎ
泳ぎ飛ぼう

(16.12.20)

蛇腹

落ち葉掃く
箒の先から
零れ落ちる

空白の手が
隙間を縫う
乱世と治世

在れば厭う
自然体から
人工物まで

背かれるほど
従うしかない
数ならぬ心身

見失われて
探し当てる
体の整え方

気体化して
縄文遺跡を
散策すれば (16.12.23)

烏鶮

十二月の雨に
眼鏡のまま
顔を洗った

二階の窓で
透かし見る
通学路から

手探りやら
足探りなど
手繰り寄せ

田植えから
稲刈りまで
体を割れば

肩を沈めて
振り上げた
杵で臼から

削り出した
空白を縛る
命の掛け声

(16.12.27)

妙術

老いた猫が
数えている
煤払いの数

信も不信も
差し替えて
神棚下ろし

ここからも
むこうでも
どこかへと

キヤッチし
パスしたら
スルーする

余白確かめ
間合い立ち
会釈したら

無意味から
年の瀬まで
生きる稽古

(16.12.30)

摺り足

緩い靴下で
慣れた足を
足袋に入れ

古仕立ての
着物を纏う
脛が嬬やか

身体に残る
田舎正月の
筒袖に下駄

白足袋から
草鞋までの
祭りの春秋

男と女とで
育む季節が
織りなす綾

脱ぎ置かず
衣紋掛けに
伸ばし眺め

(17.01.03)

目配せ

街灯が切れ
雪明かりも
無い年越し

所在無げな
庭の雪吊を
束ねる柱が

幹のように
差し掛ける
投網の冬空

駐車場には
迷い込んだ
一羽の鷺が

車すり抜け
羽撃いては
広さ確かめ

捻った頭が
羽毛の隙間
体内奥深く

(17.01.06)

点綴

車窓の様に
作り付けの
壁区切り柵

戻ってみる
雑誌架には
手触りだけ

閲覧列車が
差し掛かる
吹き溜まり

摘み食いし
重ね整えた
活字に埃が

運転席から
覗き込んだ
引き込み線

撓む書架で
切り替わる
読書信号機

(17.01.10)

鶏鳴

猫と鼠から
一飛びする
鶏と鼯まで

屋根裏から
鶏小屋まで
血まみれに

空を切つて
飛び散つた
力みと遊び

生み落とす
訳知り顔の
卵とともに

喉もとまで
問わず語り
こみ上げて

引き絞つた
夜の帳裂く
寢覚め空砲

(17.01.13)

上へ下へ

屋根の裏を
覗き込んで
凍りついて

落雪を待つ
迫り出した
屋根の傾斜

冬鳥の尾が
軒端を掠め
絶え間なく

聞き耳立て
家鳴り前に
浮き足立ち

零れ落ちる
氷柱の雫に
日差し透け

帰属すべき
冬の井戸を
穿つ無重力

(17.01.17)

照準

藁履脱いで
竹スキーに
履き替えて

裏山深くで
構えてみた
背の空気銃

覚えた字の
活字を込め
狙いを消し

鎮める肩に
吊るされた
両肘の裏表

兎飛び跡を
追いかけた
紙の斜面に

見え隠れる
字体を残す
祖母の昔話

(17.01.20)

振れ幅

庭の枝雪も
軽々と落ち
雪吊柱叩き

見えてきた
幹に連なる
枝ぶりから

落雪に映り
折れ曲がる
腕の一振り

肘から先を
スコップに
腕を奮えば

二の腕から
肩先超えて
振り出され

外れた弧が
際立たせる
選ばれた弧

(17.01.24)

傍系

吹き荒れて
振り返った
冬の金縛り

目と耳とが
出合うのは
どんな時空

白昼夢から
臨死体験へ
違いの識別

見て盗めば
言葉だけが
ひとり歩き

区別できる
名付け親が
生む意識の

鼻から耳と
目へ抜ける

脇道の退化 (17.01.27)

もつれ

幼年の耳に
刻み込まれ
織り込まれ

祖母が語る
忘れがちな
昔々語りが

跡形もなく
消え失せた
思春期まで

綾取りやら
折り紙など
狭まる起点

お終いまで
仕上がらず
歪みもつれ

初源の形に
解けるまで
揺らせるか

(17.01.31)

下着幻想

自在に滑る
下肢が働く
爪先と踵先

安定と不安
定が交わる
土踏まずで

計った様に
打ち飛ばす
上肢の内腕

対の幻から
這い出して
擡げた首筋

幻の鉢巻が
抜け落ちた
腹の底から

見えだした
三本尾根が
交わる頂へ

(17.02.03)

転写

空を明るく
舞い落ちて
まといつく

払い落とす
傘の重さが
すりぬけて

分厚い本の
頁の底まで
くり抜かれ

融雪水滲む
雪面に残る
活字の足跡

指で綴った
複本の背が
立ち並べば

櫛のように
撓む書棚を
漕ぎ分ける

(17.02.07)

読み書き

読み過ぎ
たみたいな
図書館から

デパートの
本屋の棚へ
読みかけた

どこまでも
手つかずの
文字の羅列

急ぎ込んで
書棚を渡る
書き手から

橋渡されて
立ち止まる
読み手まで

掛け違えた
眼鏡の奥で
交わす挨拶

(17.02.10)

内観

短パンに
半袖でも
寒くない

調節器が
子どもに
あるのか

殴られて
きな臭い
体壁から

内臓まで
命が綴る
春夏秋冬

目覚めて
眠るまで
喜怒哀楽

小さくも
心踊れば
身も動く

(17.02.14)

分身

外遊びから
弾き出され
プラモ作り

乗り出して
かいな返す
取り組みに

潜り込んで
切り離して
繋ぎ直せば

隠れていた
体内ロボが
起き出して

取説のない
独り相撲が
稽古代わり

老いた体の
廃品利用を
見せた祖父

(17.02.17)

欠けら

二月の雪が
窓辺の光と
影を追って

融ける前に
欠けた穴を
探し出して

誰かにしか
聴こえない
音楽が鳴り

誰かが読む
一言一句で
沈黙が溶け

降り止んだ
晴れ間から
透明な骨が

詩を響かせ
書を書いて
宇宙のはて

(17.02.21)

後先

解けるまで
知恵の輪が
転がり始め

幼少期から
老年に至る
思案投げ首

手を返せば
達磨転がる
心身一如に

空を切つて
身を投げる
殺意までも

二の腕深く
折り畳んで
羽交い締め

撮り逃した
梅に鶯鳴く
先駆け花弁

(17.02.24)

風評

避けようか
逃げようか
二月の風見

一億中流の
仕分け先が
差別と詐欺

競り合いに
入り込んで
向き合えば

敵が近づき
止める力が
擦り抜ける

動きの技が
我を消して
成り立った

事実無根が
歴史的にも
物語的にも

(17.02.28)

春屋台

滑らないで
三月を聞く
土踏まずに

かいな返す
潮渦巻いて
半島の辺り

右腕でない
さん付けの
似合う人が

実はどこと
掘り返せば
根っこだけ

尋ね歩いて
菜の花から
卯の花まで

口ずさんだ
手毬唄から
薫る更地へ

(17.03.03)

同化

取り組もうと
踏ん切りつく
待ちぼうけに

急ぎすぎても
正解不正解に
けつまずいて

食べたい時が
賞味期限とは
何時か解らず

数分だったら
とんでもない
集中力の子供

努力も習慣も
積み重なれば
惰性に溺れて

心身を極める
自然に預けた
骨肉が争って

(17.03.07)

ずれ目

雪解け水の
流れを追う
融雪溝から

蹴落とした
上達しない
足音が響く

信と不信の
合わせ鏡に
居付いた姿

問い詰めて
解った手に
騙される腕

解き放った
妄想めいた
内側の動き

逆立っても
翻る魚群が
体内で反転

(17.03.10)

遅延片道

狭い庭でも
雪つり外し
広がる空に

お別れ会の
子どもらが
花壇を描き

根こそぎに
生え変わる
声と眼差し

母の領域を
すり抜けて
靡く後ろ髪

手を拱いて
寄り添えば
間に合わぬ

気がつけど
通り過ぎた
花盛りどき

(17.03.14)

手工

筒のように
内へ外へと
呼吸を通す

猫の目線で
渡り歩けば
季節の舌が

閉じ込める
春を破って
広がる宇宙

手づくりの
探査船から
舞い降りて

閉めた襖で
試してみる
星空投影機

親元を離れ
関係づける
時間を探す

(17.03.17)

狭間

大工仕事や
鍛冶仕事の
作業小屋に

居座つたら
軒遊びから
飛び跳ねて

外遊びなら
鉄屑拾いや
薪運びまで

蕨採りやら
野路までも
束ねて売り

泳げなくて
潜ることが
出来るなら

呼吸を整え
体を浮かせ
言葉を探す

(17.03.21)

刈り込み

残雪少ない
山麓を下る
雪解け水が

冬の体調を
解すように
滴り落ちて

できなくて
わからなくて
一気呵成に

咲き揃った
紅白の梅の
枝切りの技

切り詰めた
引用の跡を
引き受けて

絞り込んだ
深みを覗く
息継ぎから

(17.03.24)

若葉マーク

飾り付けた
冬写真より
春に向かう

出会いから
芽生えまで
飾りたくて

新4年生の
新入団員に
挨拶代わり

身体の中に
見つけよう
小さな仲間

ラケットを
握った腕の
長さを問い

呼び名順に
使い分けて
稽古を始め

(17.03.28)

痕跡

七年ごとに
体の組織が
入れ替わり

ネット検索
エンジンで
見損なつた

村の記憶も
残つてない
卒業文集に

鼻つまんで
ブリキ屋の
亜鉛の匂い

触ってみる
台風の日の
足の切り傷

転びかけた
囲炉裏端で
灰神楽の熱

(17.03.31)

欠落

雪吊り杭の
抜き跡から
芽吹き始め

落盤事故を
塞ぎきつた
恐怖の実層

埋められて
見失つてる
土器の幸福

身丈に添う
順風満帆を
掴み損ない

入江が囲む
干満を計り
浅瀬を渡り

寝そべった
島影に休む
脱臼した鳥

(17.04.04)

音痴

喉のあたり
裏返された
手ほどきか

響き具合で
姿勢を正す
音楽室から

引き返した
廊下の端で
扉が閉まり

聞き慣れぬ
楽器の様に
呼び戻され

立たされる
S字姿勢が
保てなくて

逃げ隠れる
迷路の様な
声を追って

(17.04.07)

橋上

もう二度と
登攀しない
遠くの間々

水面に散る
母の最期を
花筏が覆う

眼鏡橋から
遠ざけたり
近づけたり

渡りきれず
橋げたから
ぶら下がり

手を尽くし
取り落とす
流れのまま

観るものの
音に聞こえ
逆巻く渦底

(17.04.11)

時の渚

通い続けて
覗き読んだ
木と鏡の森

漏れる声を
引き出せば
ヤモリから

釣り上げた
イモリまで
体幹が働き

浮き上がる
四肢が辿る
時間の手足

潜む胎内で
圧縮された
数億の時間

気づく体が
稽古すれば
死の淵まで

(17.04.14)

気球

乱れ飛んだ
春一番には
無数の中心

一まとめに
包みあげた
春の体調が

呼び込んだ
安全柵から
解き放つて

五体すべて
無分別まで
まとめ上げ

忘れ去った
受動からも
能動からも

見放されて
繋ぎとめる

数行の基本 (17.04.18)

やれやれ

知り合つた
同性の森で
迷つたなら

食の技まで
馴染む店に
連れ出され

見過ごさず
場の細部に
拘り過ぎず

背骨正して
手足休める
舌触りから

見えずとも
自在になる
食卓の来歴

潜り抜けて
指なき手に
もて遊ばれ

(17.04.21)

下絵

萌える饒舌
揺れに揺れ
言葉もなく

立ち竦む場
隅から隅へ
馴染ませる

檻の隙間を
はみ出して
崩し溶かす

ありふれた
定形の力が
破く型紙に

動き続ける
呼吸姿勢で
演じた失態

収め転じて
片付けられ
まだ見えぬ

(17.04.25)

逃れ道

日差しから
木洩れくる
爆音の葉裏

逃げ込んだ
運河の底に
水鳥の足跡

佇む水辺に
吹き寄せる
流木の残骸

一笠一杖が
山間深くで
途絶え果て

谷筋を穿つ
研のような
説法と聞法

無事息災も
扇ぎ扇がれ
木の葉隠れ

(17.04.28)

調律

始まりから
終わりまで
仕切られず

意味の通る
訳文よりも
原文の調べ

折れやすい
柿の枝から
萌える囁き

奥深くまで
差し込まれ
蠢く擬態を

絞りあげて
共鳴させる
オノマトペ

触手絡ませ
辺縁限なく
響き交わす

(17.05.02)

若葉末節

緑なす陰で
人方ならぬ
稽古の名残

跡形もなく
しゃがんだ
夢の腐葉土

振り落とす
幹の年輪を
枝葉が隠し

根深く潜む
拘りが育む
持続の巧妙

いっどこで
間違ったか
問い続けて

煮詰まらず
煮崩れない
得意技まで

(17.05.05)

偏食

何か食おうか
とじていたら
何も食えない

何も食わない
ままにいると
何も食べれず

これ食べよう
とするだけで
これを食えて

あれ食べよう
とするだけで
あれを食えて

あれもこれも
めぐり食えば
いつの間にか

食べ永らえる
生き心地から
食べられそう

(17.05.09)

花器

雨に濡れた
新緑が乾く
街中を抜け

青葉彷徨う
Y字路から
袋小路まで

歩む歩幅で
投げ入れた
手触りから

跳ね返った
時空の枠に
浮かぶ表象

有りの儘の
未経験から
謎の形式へ

差し込まれ
立ち上がる
花の違和が

(17.05.12)

圧縮

食べ分けて
毛虫が這う
葉脈の食卓

日々新たに
皮膚感覚で
着替えたら

体幹が通り
掃除も楽な
居所の設計

手癖足癖で
縛られたら
動き続けて

意にならぬ
呼吸を整え
身体を筏に

内に潜って
泳げるまで
気化すれば

(17.05.16)

接写

軒下濡らし
入り込んだ
六月の雨に

青大将から
逃げた鼠が
啞え落とす

子鼠が震え
張り付いた
青畳の隙間

閉じた歯を
抉じ開けて
真珠を探し

背戸の川で
鼠捕り籠を
浸し見れば

ひくひくと
ピンク色に
もがく鼻先

(17.05.19)

草いきれ

前倒された
夏日続きに
背伸びして

雌雄の鶏が
踏みしだく
恐竜の痕跡

艶めかしく
覆い隠して
そよぐ羽毛

蛙と蚯蚓を
闘わせても
止まぬ鳴声

刈り取れず
擦れ違った
夏草の傷跡

夏戸が軋む
建て付けの
隙間を抜け

(17.05.23)

無造作

家主不在を
覆い隠して
絡まる葛に

老老介護も
果てしなく
崩折れそう

納屋を出て
本宅へ帰る
無言の挨拶

家構えから
消え去った
心構えへと

持ちこたえ
届きそうな
体構えまで

意識された
技を無意識
に行う稽古 (17.05.26)

枝ぶり

下し過ぎず
外し足りた
去年の剪定

照り返して
若葉眩しい
五月の夏日

葉裏に潜り
忍び寄れば
アマガエル

川面の桜が
噴水の先に
ビル窓磨き

こっそりと
入れ替えた
写真立ての

埃を払って
自然時間を
立て掛ける

(17.05.30)

流木

静止画には
収まらない
朝方の雷雨

増水激しく
二度渡して
振り返れず

立ち返って
掛け損なう
橋上の体感

流れるまま
見失ってる
川面を浮沈

両岸も遠く
川底見えず
知らぬ流れ

濡れ細った
枯れ枝から
伸びやかさ

(17.06.02)

寄り添い

庭草刈れば
老いた母の
草とる姿が

口ずさめば
古謡の想い
苔を残して

意識体から
感覚体まで
忘れされば

未だ知らぬ
草の根深い
伸びやかさ

ただならぬ
勢いだけが
筆り取られ

騙されても
立ち返れる
あるがまま

(17.06.06)

舟状雲

芥子粒まで
繰り出した
タコ糸の先
召し取られ
天と地まで
とどかない
浮き上がり
響く手触り
巻き上げて
丹田極めて
屹立すれば
反り返って
覗き覗かれ
宙返りする
凹凸万華鏡
足踏みして
跨り乗った
胴体が割れ

乗り換える
手足のまま
飛び出せば

乗りに乗り
見える空に
先立つ地面

両足で迷い
跳ね返れば
着地の骨格

(17.06.09)

切り株

立ち竦んで
庭木の年輪
覗き込めば

宿り隠した
立ち姿から
枝ぶりまで

樹木構造が
井戸の底に
畳み込まれ

枯れて沈む
樹木の根を
響き放って

根こそぎに
汲み上げて
溶き解せば

見え透いた
馴染み形に
手足取られ

(17.06.13)

移ろい

木漏れ日に
目を晦ます
花を手折り

振り返つて
滑り落ちる
鼻先めがけ

結び分ける
落とした声
流れる視線

足袋を履き
足首を滑り
届く指先へ

弾きかえす
手旗信号が
宙に浮いて

跨ぎ越した
領域を渡る
微塵の行方

(17.06.16)

触手

振りほどき
握り返して
扉を開けば

茂みの中に
飛び去った
鶯の鳴き声

跨ぎ乗った
陸奥山道と
バランス板

空耳に響く
時鳥の声の
不在を尋ね

山裾あたり
巡り来れば
木霊する滝

傾く岩場が
なまめいて
濡れ不揃い

ひび割れて
吸い込まれ
消え残れば (17.06.20)

旋毛

息を刷毛に
滑り降りる
小さな蟻塚

技を競った
一番病から
帰り着いて

外側ばかり
眺めていた
花卉の内側

ぶつつけた
膝小僧から
痛みが抜け

足袋が弾け
足首の裏を
流れ落ちて

手癖足癖が
重い体から
洗い流され

(17.06.23)

浮遊

祖父を追い
分け入った
初夏の山道

老いてみて
潜り抜ける
既視感の森

老老介護で
呼吸法から
転び方まで

杖の一撃が
瓶に沈んで
蝮が揺らぐ

組み立てる
プラモから
遡行すれば

鍛える前の
足腰使いが
甦える足場

(17.06.27)

架橋

釣れなくて
川面滑らせ
投げる平石

対岸めがけ
跳ね滑って
忍者の歩幅

数えきれぬ
水面走りを
繰り返して

あるがまま
沈み込んで
浮き上げば

流離うだけ
遠ざかるか
あるべき橋

手足骨格を
橋桁の様に
組み直せば

(17.06.30)

格子

透し見れば
老い半夏生
雨に濡れて

木虫籠擦る
棒切れ握る
名残の掌に

爪先立って
雑巾掛ける
嫁取り民家

組み合った
家と身体が
上へ下へと

叩き出され
見え隠れた
夏の大掃除

掘り起こす
縄文遺跡に
身体の記事

(17.07.04)

浮き身

夏風邪ひき
立ち止まる
踊り場から

緑を裂いて
這うように
滑空する燕

蕩けすぎた
日常の中の
立ち姿では

手も届かぬ
羽の生えた
背骨が翔ぶ

着古された
皺だらけの
普段着から

抜け落ちて
浮き羽搏く
黒い稽古着

(17.07.07)

語り口

構もせずに
怠りもなく
待ち受けず

身も蓋とも
僅かばかり
翻るだけで

来し方から
行末見えぬ
ホバリング

国家の起源
跨ぎ越せば
住居の始原

崩れかけた
民家が遮る
格子の彼方

語りこぼし
蚊帳を捲り
夏の縁側へ

(17.07.11)

浮遊操作法

こつそりと
朝陽に浮く
仕立て下し

飛び跳ねる
呼吸を絞る
蜘蛛の巣に

干からびて
抜け落ちた
老いの手本

同じ年頃の
祖父の姿に
胴体着陸し

反転揚力で
体内感覚に
潜り込めば

胎児以前に
溯るほどに
死後へ遊行

(17.07.14)

川下り

いつの間に
開け放した
夏の顔から

溢れ落ちる
飛沫が乾き
消える響き

聞き取れず
聞こえない
振りをして

やり過ぎ
景観を巡る
起居動作に

埋め込まれ
隠れた声を
掻い潜って

身体の奥に
震え伝わる
雨降る叫び

(17.07.18)

起居の渚

猛暑日なら
隙間を作る
外出着込み
ぐんにやり
凹みそうな
舗道の雑草
引き抜けば
火花が散る
コンセント
二点を繋ぎ
駆け抜けた
身体を包み
手つかずに
目から鼻先
掴み出され
来し方から
解体される
行末までも (17.07.21)

石蹴り

足の甲から
ころがした
礫を指掴み

重さを点に
取り込んだ
肉体が拓く

放物線から
抜き取った
接線が伸び

掴み上げる
愉快な腰で
トンボ返り

舌で拾って
丸めた玉に
拡がる宇宙

古い先短い
罫線で刻む

稽古の門人 (17.07.25)

賭け虫譜

寄生と共生
いずれとも
見分け難い

昆虫絵本を
開いたまま
戸惑う重心

這い出して
運び屋探す
幼虫の群れ

しがみつき
運ばれ先に
咲き散る花

離れ離れで
有為転変に
ばらまかれ

出会い頭の
再飛行あり
巣籠もりへ

(17.07.28)

括弧

老いの渚で
痩せた脛を
洗い出され

脱ぎ捨てた
下駄の奥へ
漕ぎ戻れば

三つの◇の
分散力へと
引き裂かれ

地団駄踏む
処世の船底
ひび割れて

積み上げた
習慣も破れ
耐えきれず

包み包まれ
隙間に縫る
肉体が笑う

(17.08.01)

擬態

庭先を掠め
老眼で読む
動く草書体

振り返れば
縦走路隠す
無音の瀑布

終始不明の
蟻の隊列が
纏わりつく

雲海に對い
ほんとうの
自然を問う

蜘蛛の巣を
描いた手で
蝗を捕まえ

黒焼きする
祖父の手の
困炉裏端へ

(17.08.04)

予報円

分かったと
分からない
が闘ぎ合い

どうとでも
なりどうに
もならない

台風の目が
朝方に通過
したはず？

円弧の端が
崩れるのと
釣り合った

創生を成す
もう一方の
端をつなぐ

下と上りが
描く傾斜に
生命の輪が

(17.08.08)

舞台

入り込めず
そつと遠く
眺めるだけ

声は聞けず
場面だけが
入れ替わる

踵を浮かし
宙なる腕が
泳がす体に

覆い被さる
闇の演者が
穿つ紙芝居

捲り終えた
場面を綴る
紙縫り作り

見出された
場を見切る
無類の演技

(17.08.11)

枯れ井戸

絡みついた
葛を手繰り
崩れそうに

吊るされて
体が揺れる
視線の底へ

影のような
夏の井戸に
身を投げて

浮かび出た
無意識から
手がかりが

ここまです
消し込んで
これからも

汲み上げて
見切る先へ
飲み干せば

(17.08.15)

墓参

気掛かりな
タクシーと
空模様だが

夏風邪から
はじまった
体内の季節

共同墓地の
上り下りが
整備されて

J Rやバスの
乗り継ぎが
往復ともに

乗り心地も
混み具合も
ほどよくて

天と地から
海辺からも
ほど遠くて

(17.08.18)

灰神楽

雑草の庭に
虫の居所が
見当たらず

デジカメの
焦点を体に
向けながら

線のように
ズームする
意識を絞り

掴みとった
蝗の腹から
伝わる響き

取り出した
籬の鼓動を
包む掌から

落ちた跡が
下腹に残る
囲炉裏端で

(17.08.22)

穴蔵

何にもなら
ないように
できていた

歩み方でも
きれぎれの
棒のように

折れ曲がり
散らばった
足跡どれか

踏み当てる
拾い上げた
どれか一つ

手にしたら
踏み感った
無数の余剰

数えあげて
誰か一人が
壁に刻んだ

(17.08.25)

字画

ボタンを押し
横断歩道から
見上げた夏空

首を畳んでは
伸ばすように
空をゆつくり

絵筆のような
寝起きの鷺が
調整飛行して

伸び縮みする
羽ばたき音が
体育館に消え

寝転がっても
気づきにくい
体内空間では

足裏から頭へ
ゴロゴロする
波動が抜けて

(17.08.29)

姿勢

絶滅しても
古代生物の
図鑑動物園

一部だけが
書きかけの
不明の図柄

何ごとかを
始める前の
どんな形が

どのように
乱されたり
崩されても

子どもには
わからなくて
見届けたい

立ち位置を
探し続ける
当て所なき

(17.09.01)

小言

痒みを伴って
繰り返される
毎日の皮膚も

手が届くから
搔いてしまう
老いの繰り言

七年も経てば
入れ替わって
蟬の抜け殻に

取り残された
近所住まいの
古老の後ろ姿

思い為す事が
ひび割れ続け
る老いの手相

どうしようも
どうしようも
人ならざる心

(17.09.05)

無駄履き

切り倒され
売り払った
桐の木の株

花の香りが
乗り移った
枯れ一葉を

厚歯で踏み
磨り減った
鼻緒が切れ

裸足で帰る
砂利道から
走り歩いて

何を踏むか
一足ごとの
挿げ替えに

歩くことと
走ることの

素足の記憶 (17.09.08)

体内便り

四季が崩れ
季語も失う
昨今の季候

植木職人の
手が入って
整えられて

家の中まで
忍び込んだ
庭の佇まい

帰り着いて
散歩の後か
走った後で

違っている
身体地図を
辿り直せば

身包み抜き
背骨を挟み
挨拶交わす

(17.09.12)

芋虫

繁る庭木が
剪定されて
深まる夜空

樹下の草が
削り取られ
更地もどき

老眼なりに
背筋伸ばし
裸足で掴み

樹木の様
立ち絡まる
若木を夢見

伸び縮みが
スライドの
梯子を畳み

前後左右に
重ね稽古で
上下を探る

(17.09.15)

海綿

寝違えたら
馴染まない
身体と時間

波長合わず
踊り間違え
ストレッチ

姿見えない
相性となら
擦り合うか

弱まる程に
星座の形が
見える視力

吸い取られ
見えてくる
女性性から

欲するまま
腹を緩めて
伸ばす背筋

(17.09.19)

腹立ちぬ

逃げ出せば
飛んでくる
小石や罵声

案山子まで
立ちすくむ
棒立ち下校

姿勢の裏で
縮みあがる
骨盤の記憶

誰に向ける
胸を張って
伸ばす背筋

傾く夕日に
樹木の影が
墓標の傾き

腹を割れば
立ち揺れる

弥次郎兵衛 (17.09.22)

波乗り

滑りそびれ
逃した体で
春画を捲る

はめ殺しの
窓から覗く
身体の内側

内臓に乗り
滑り込めば
溶ける手足

無意識から
溢れる蛹が
伸び広がり

浮世絵から
はみ出した
腸管を潜り

ねじったり
ひねったり
しない体調

(17.09.26)

遺失体

担ぎ手から
遠ざかった
お神輿の影

俵担ぎから
解放された
収穫の欠如

在るはずが
身近すぎて
担われざる

物に埋まり
便利すぎて
分からずに

進化を経て
手に入れた
成れの果て

枝葉伸ばし
幹の層へと
伸びる切株

(17.09.29)

伏流体

目覚めれば
アメデオの
裸婦像から

立ち上がる
朝の姿勢が
心づもりに

日に一度は
試していた
上下逆さま

腹を捌いて
吊るされた
眺めの中へ

歩き出して
やってみて
芽生える的

昨日までを
洗い落とす
腹づもりに

(17.10.03)

円環体

まるくない
十五夜から
輪を描いて

三点を結び
動きまわる
三角形こそ

切り取られ
場に浮かぶ
三つどもえ

前後左右に
上へ下へと
零れ落ちて

さだまらず
たもてない
初対面から

とりあえず
会釈交わす
不安定まで

(17.10.06)

見掛け

見せ場から
探し尽くす
場外乱闘も

健康であり
健康でない
その有り様

踏み外せず
病的階段の
上り下りに

本当らしい
姿勢を質す
ためらいが

見尽くせず
伺いきれず
躰の不思議

群れきれず
孤立できず
繋ぎ目だけ

(17.10.10)

演戯者

しかるべき
時と居所を
論ずように

蜻蛉や蝶が
弓形の島を
俯瞰するか

追いかける
鳥の体位と
動きめがけ

風習に抗う
風力発電の
耳障りな杭

肢体を洗う
季節に晒す
骨格に筋肉

日暮れても
囁きかわす
子猫と幼児

(17.10.13)

穴蔵

踏み止まる
庭先に続く
蟻の行列が

書き損じた
字体の如く
途切れたら

振り出しに
戻れなくて
泣き叫ぶ闇

足探りから
手探り辿る
背骨の両側

刷毛で嗅ぐ
感覚めいた
体内の節目

樹間を走る
動植二心を
張り巡らせ

(17.10.17)

風穴

子持ち鮎や
松茸の様に
背筋が伸び

秋の食欲に
立ち上がる
背骨の傍で

前後左右に
身体の芯へ
揺り戻され

腸の奥まで
橋渡される
未踏の老い

差し向かい
打ち合わす
奥の手から

響き渡って
矩形の風が
切り取られ

(17.10.20)

伸展

這い回る蟻
庭から消え
風雨の機縁

剪定作業の
落ちこぼれ
松の双葉が

日差し乾き
棕櫚の箒で
払った姿勢

老い先近い
玄関先から
腰痛が消え

渡りきった
太鼓橋から
振り返れば

接地破れの
雨樋を抜け
這い出す蟻

(17.10.24)

ずれ

刈り込まれ
違和を隠す
庭木の姿勢

百年経って
張り巡らす
枝ぶりから

見下ろせば
日差し辿り
根張りの跡

包み包まれ
幹を隠して
年輪が撓み

自然の如き
動きを秘め
飛び立つ蝶

木陰に散る
跡形もない
位置と構え

(17.10.27)

無体

古靴脱いで
葉脈たどり
枯葉の海で

音と訓読み
解けぬ結び
脱ぎ捨てて

素足を掴む
二艘の舟を
交互に履き

蹴り放った
爪先までの
鼻緒の長さ

伸び撓んで
左右に漕ぐ
足裏を櫂に

前へ後ろへ
幹で捌いた
体感が響く

(17.10.31)

秋暖簾

通り抜ける
銀杏並木の
左右非対称

乗り合わせ
身体で聞く
ズレと歪み

なだらかに
骨身に触れ
響く丘陵地

枯葉羽織り
一足ごとに
傾く扇状地

蛇行し緩く
内臓に触れ
季節が流れ

散り漂えば
岸辺に沿い
動き覚めて

(17.11.03)

背に腹は

誘い出され
区別できる
好天と荒天

自然の渚に
打ち寄せる
贈与の潮時

身を浮かべ
舳から艫へ
気を走らせ

膨らむ帆を
前後に張り
占う風向き

波に洗われ
拡がる船腹
甲板を傾け

船倉を抜け
寝返ったら
左右知らず

(17.11.07)

背後霊

蜻蛉が壁に
時を刻んで
秋の日差し

水平飛行と
交差させる
垂直姿勢に

気づくまで
剥がれない
錐揉み姿勢

抜け出した
呼吸が繋ぐ
内臓揃って

後ろ向きに
歩き出せば
近づく他者

迫り出した
背中を抜け
内に潜めば

(17.11.10)

口癖

小魚や蛙を
捌いていた
小川の流れ

紐で縛った
ヤゴの尾を
追った距離

歳月を潜り
自作の凧を
手繰る唸り

いまここを
呼び寄せる
音楽と礼節

体格を解く
記憶の中の
幼い体付き

そういえば
手掴みする
骨の時間が

(17.11.14)

抜刀

身体を通る
管のような
入口と出口

抜き取られ
納めるまで
辿り着けず

掴み取った
空を手放す
骨と皮の間

使う道具で
触っている
身体の感触

骨格を辿り
歪みを治す
内臓の姿勢

崩れる前に
出生前へと
遡行すれば

(17.11.17)

訛り

耳のように
そばだてて
身体を聞く

住み慣れた
物心のまま
言葉で訊ね

耳慣れない
姿と形から
始まる愛聴

気づかない
同行二人の
合わせ鏡に

伸び広がる
天と地まで
響く息遣い

見てくれと
異なる姿勢
で回る風車 (17.11.21)

二の足

縛れた様に
印字される
日捲り人体

左右何れか
写り込んだ
最初の一步

掴み取った
肋骨の裏の
臓器の名前

真っ直ぐに
聞こえない
匂いの感触

雌雄を嗅ぎ
分け散歩を
記憶する手

真っ直ぐに
突き出せば
消え去る胴

(17.11.24)

揺らめき

通り過ぎる
交差点では
共鳴を覚え

三叉路から
Y字路まで
調律違えば

震え立った
音叉が響く
安らぎの間

無音の奥へ
辿り着けば
無臭の分別

骨と皮との
間で謳えば
内臓の表情

日々出逢う
身体が舞う
心に聴いて

(17.11.28)

流域

光り輝いた
浜の茂みに
吸い込まれ

山あい遠く
流れ着いた
入り江の香

四つに組む
筏となって
埋まる窪地

吹く風向き
合わせ舵で
乗り出せば

膨らむ帆に
撓み続ける
帆柱が響き

腐葉土溶け
山肌を透け
死出の愛し

(17.12.01)

引用

田んぼでは
見かけない
わらぼっち

庭木の梢に
根付かせる
沈黙の深さ

書くことは
読むことで
編み上げて

支柱の高さ
見定めれば
今年の樹高

幹と枝との
張り具合が
出会いの数

一人ぼっち
の体幹から
繰り出され

(17.12.05)

ワープ

食虫植物が
姿を隠して
地表を覆い

氷の裏側で
幼虫に会う
成虫の無言

祖母の手が
白身と黄身
混ぜ合わせ

ひび割れた
記憶を壊す
パッケージ

声も通らず
やり直せず
そのままに

藁灰の煙の
奥へ消えた
身体へ脱殻

(17.12.08)

身繕い

架け替える
事などない
橋を渡れば

一方通行で
気づかない
帰りの風景

身を翻して
送り届けた
荒巻の返信

捌くほどの
身のこなし
習い覚えて

出生の程を
切り分けて
骨身に沁み

老いてこそ
噛みしめる
無分別なら

(17.12.12)

数詩

凍った朝に
井戸水放つ
融雪ホース

雑誌捲れば
詩人と語る
研究者の頁

手当たりの
年鑑で探す
地肌の情報

書き込まれ
纏められた
乃音を求め

検索端末を
叩く書店が
静まり返り

息を潜める
旅の約束が
管から溢れ

(17.12.15)

書き損じ

空と歩道を
占うような
買い物散歩

中学部活の
忘れ形見に
瞑想と摺足

肥桶担ぎで
背中に刻む
漢字読めず

薪割りとか
農作業腹に
書き込まれ

伸縮自在な
筆法を習い
覚え忘れて

38億年の
生命時間が
のたうって
(17.12.19)

逆さ杭

山田の奥で
抜き忘れた
踵から爪先
座らされて
置き忘れた
案山子の尻
裏地を隠し
膕から跨る
騎乗位探し
肘を揺らし
腰を屈める
沈み込みに
膝の辺りを
解き放てば
上下に抜け
前後に揺れ
静まり届く
姿勢の船底 (17.12.22)

逆気配

どんな側に
佇めば気を
交わせるか

上へ下へと
乱気流崩で
不時着の朝

着替え際に
掛け違える
空っぽの鉤

見慣れすぎ
当たり前を
飲み損ない

気が向かず
意識もない
日常の狭間

何かやれば
身軽になる
虚体の身体

(17.12.26)

反転

煤払いする
踏み台から
揺らめいて

左右を取り
違えている
虚と実の差

技術の巢が
編み込んだ
虚飾に塗れ

脱ぎ捨てた
肌身を探す
遡行を試み

描き起こす
稽古録から
透かし見る

逆光を辿り
振り返れば
未踏の境地

(17.12.29)

遺失体

十字路で立ち話抄二〇十六年一月〜二〇十七年十二月

発行 二〇一九年三月三十一日

著者 吉田 恵 吉

編集・発行 〒939-8036 富山市

高屋敷731-6 吉田恵吉